

田舎の工業地域の吸引力はこの時代の交通状態が漸次改良されて行くと共に増大し、田舎の家内工業地域は特に激しい人口増加とそれに伴つて愈々多くなる廉價な勞働力の供給を示すことになつた。かゝる活潑な人口増加は家内工業の本質に基いてゐると思はれる。何故なら勞働者家族の生産力は兒童によつて嵩められたからである。現在に於ても家内工業地域に於ては多數の兒童とそれに伴ふ高い人口密度が見出される。

(未完)

新著紹介

○新地質學概論

青山信雄著 古今書院發行
定價二圓五十錢

菊判二六〇頁、美裝の手頃な好參考書である。斷つてはないが一九三二版の米國 Longwell, Knopf, Flint の自然地質學教科書を土臺とされし如く新しい方面によく觸れつゝ、風化作用から始めて著者の得意とされる造山運動に關する學說の紹介で結ばれてゐる。慾を言へば顯著なものだけでも本邦の例をあげて載きたかつた。地震學なる獨立科學があり邦書も多いからとて此の部分を全然省略されたのは著者の一見識

新著紹介

であるが、地震國日本だけに地質學的サイドからだけでも之を觀る必要がないであらうか。全體として教科書風の簡略的説明を避け一々の項目を詳述する態度が卷末の索引及び一五〇の説明圖と相俟ち不可欠の座右書たらしめてゐる。また本書が地質學全般に亘らず自然地質學のみの書であることも却て多くの讀者にとつて便利であらう。

(尾山生)

○國旗考

尾崎久彌、小川善三郎撰

昭和九年二月發行

名古屋中區老松町小川善三郎氏の著で發行である。小川氏は名古屋の證券問屋で素封家であるから、非賣品で且限定刊になつてゐる。しかし襷を厚くし賀賀を供して之を求めたならば、頒與してくれるであらう。筆者はこの書がせめて全國の小學校にすべて備付けられんことを希望して特にこの事を記すのである。本書は日の丸の旗が出来た沿革を尋ねて殆ど完全といふべく加ふるに二十三の美はしい圖版を以てし、親切丁寧な解説がある。何人もこの書以上に國旗をのべることは出来ないであらう。これを皇太子殿下御生誕の奉祝に出版された小川氏と尾崎氏の美はしい協力はこれ又學界の美事でもある。非賣品なるが故に個人として手に入らないかもしれないが、實費提供で學校の備付とあらば、恐らく小川氏は之を惜む程の人ではあるまい。

(藤田)

○支那朝鮮古美術展觀

大阪 山中定治郎著

賣價二圓八十錢

三三

七一

菊倍版アート紙に便利堂が印刷したものであるが、これは山中でやつた、古銅器、古玉、造佛、石佛、漢唐、明陶器、宋元明磁、清朝官窯、陶器、清代玉器、一千七百四十一點、朝鮮の金石、陶磁器、古塔燈籠一六二點といふ空前の展覧の中から精選品をよりすぐつて成した圖録である。しかし一般の美術商の目録とちがつて、特に東洋美術の粹をあつめられたこの圖録は之をみる丈けでも考古・美術・歴史・地理の學徒に何とも名狀しがたい感激を與へることを信じて當夏期休暇中の出版物として特に江湖に推薦する。

(藤田)

○續京郊民家譜

大阪毎日新聞京都支局編 賣價十二圓

さきに昭和六年三月京郊民家譜を天下に紹介した毎日京都支局の岩井氏は更らに局員武井清志君や森田蘆舟君を督促して續京郊民家の寫眞解説に盡力せしめた。丁度この寫眞は昭和六年四月からずつと毎日の京都版に出たので好事家の注目を惹いたものであつたのを、今度も亦便利堂に命じコロタイプ版にした。かくて京都の郊外から丹波三郷、近江栗太郡までに亘つて約二百の民家の圖録が出来た。一々の民家については簡単な解説があつて、其寫眞の指示する要點を明にしてある。何といつても日本文化の中心、王城に近い農村が三千年間、郷土意識を涵養したこの自然の靈境からのヒントを得て、手作りの自分等の住居そのものにも、自から意識せざる美術を發揚したのが即ちこの美はしい二百枚の寫眞にまざまざしく映じてゐるではないか。民家の研究年を追ふて盛ん

ともなつてきたが、一つ一つの民家をみてゐる目には左程にも感興をひかなかつた、屋根や木組や建築のプロポーシヨンが、かうした一卷にまとまつて、自分の生れた土地にかくまでもしたはしい美的表現があつたのかと教へられる我等は、今日までいかにも云ひしれぬ失念をしてゐたことに注意せざるを得ないであらう。筆者はかうした民家の集をみて、まだまだ日本の人は自分等の手近い所を見つめねばならない事を絶叫したい、さうしてかゝる書籍によつて建築に携はる人々の藝術心が日本風に淳化されなくてはならないと考へる。

併せて京都の附近こそ民家研究の黄金郷である。京都を離れて遠くなる程、かうした美は減ずるといふことをのべて人文地理學者の參考にもなるこの民家譜をおすゝめする(藤田)

雜報

○地形的斷層決定法に就いて

本誌九月號一五七頁に記された筆者に關する部分は多少誤解があると思はれる。筆者が地理學年報第二卷一三八—一三九頁に書いたのは、數人の地形學者が皆認めた斷層のみを用ひて「斷層圖を作ればよい」といふ意味ではなく、このやうな方法は「間に合せの方法」であり、「地形から假定線を求める」方法であり、豫察的なものに過ぎないが、それでもかくすることによつて、侵蝕量を斷層崖と考へたりするやうなひどい間違ひが、いくらか